
平凡な日常は...

平凡の男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平凡な日常は…

【Nコード】

N4891D

【作者名】

平凡の男

【あらすじ】

平凡な少年佐藤洋介はいつもの図書室である黒い本を見つけて…ある少女と出会い、洋介の日常は崩れていく

1（前書き）

初投降なのでダメ文ですがよろしく願います。このあとの展開はあまり考えてないので感想やアドバイスなど願います。

「はぁぁー」

と、ため息を最近ついてばかりだ。いや、最近ではなく生まれてからずっとなのかもしれないが……

紹介が遅れたが、僕の名前は佐藤^{さとう} 洋介^{ようすけ}だ。
髪はサラサラ、身長は170センチ。

あと、一番の身体的特徴は片方が二重で片方が一重だ。
顔は下の中あたりだと思ってる。

趣味はアニメとか漫画とかゲーム、いわゆるオタクだ。高三の今までこの趣味ってヤバいと思うがしかたないじゃん、好きななんでもの笑

そんな僕もある事情であるボロアパートで一人暮らしをしている。
このアパートの利点は高校に歩いて10分だけだ。そんなことを思ってると思う。

今、僕は高校の図書室にいる。昼休みは大抵昼休みになるといつもここにいる。別に友達が教室にいないわけではない。ある程度親しい人もいるし、それ以外の人ともそれなりに接している。

だが、昼休みは人の少ない図書室に行きたなる。
いつも教室にしていると疲れてくる。
あんまり人付き合いとかが苦手だし。

「こんにちわ」

と事務的な挨拶

拶を司書の先生として、読む本を探すために本棚の所に行く。

いつもの本棚を見ていると見慣れない

黒い本があった。

「助けてえー」

とかすかな女性の声が聞こえた。

まわりを見渡すがいつものかわらない風景しかなく、いつのまにかその黒い本を手に持っていた。

よく見てみるとその黒い本には古いお札が貼ってあった。

それを見てもとの場所に戻そうと思ったら、

「助けて、お願い」

また、あの声がさつきより強く聞こえる。迷ったあげく、昼休みが終わりの時間がせまっていたのと謎の声の件もあり借りることにした。
司書の先生の所に本を持っていくと

「そう、あながこれを」

「何かある

んですか？」

「いいえ、何も無いわ

よ フフ笑」

と妙な感じの司書の先生

に深く尋ねたかったが時間も迫っていたために事務的な挨拶をして俺は黒い本を持って教室に戻った。

洋介が図書室出から司書の遠藤 えんどう 和 か

美 ずみ が一人になった図書室で笑っていた。

「これからおもしろくなるわ」

それから数

時間がたち、教室での帰りのホームルームを終え、ボロアパートに帰った洋介は例の黒い本を眺めていた。

謎の声は聞こえなくなったが黒い本のお札を剥がすか剥がさないかということが頭の中を支配していた。

だが、剥がしてみたいという欲求に勝てずお札を剥がしてしまった。

すると、黒い本から大量の

煙がでてきて狭い部屋を煙で満杯になった。

「オチ、落ち着くんた、僕。

ま、まずは、換気しないと」

考えは冷静だが対応はテンパりながら

も部屋の窓を全開に開ける。

いつきに煙が部屋の外にぬけていく。

すると、さっきまでいなかったはずの

少女が黒い本の側に泣きそうな顔で立っていた。

「えっと、きみ誰かな？」ちょっとお

どおとして聞いてみる。

あんまり女子と話してこなかったために緊張してしまった自分が情けない。それでなくともそこに立ってる少女は美少女である。背は160あるかないかで髪はロングで目がパッチリして小顔と俺のツボをすべておさえてるときてる。まさ清楚と言言葉が似合う少女だった。その少女を見てみると

「ひつく、ひつく」としか言わず落ち着くのに2、3時間待った。

「もう、落ち着いたかな、

かなー」

某ナタ少女風に聞いてみると

「あの一

すいませんでした。ご迷惑をかけて。」

「別にいいよ、それで君は誰なの？」

待つてましたと言わんばかりの満面の笑顔で

「はい、私はエリナ・シユタインです。」

先ほどは封印を解いてもらいありがとうございます。

いきなりですが手をだしてもらってもいいですか？」

何を言ってるのが頭の中で混乱しているうちに彼女が手をのばしてきたので慌てて手をのばしたら彼女が僕の手を握って

「契約完了です。」

これですつと一緒ですね。」

満面

の彼女の言ってるのが頭の中でさらに混乱していたが

「はあー」とため息しか出ないが次の行動は決まっている

「何だって

これからため息がつきなそうだとホホオ

」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4891d/>

平凡な日常は...

2011年1月15日22時14分発行